

保育実習（施設実習）に関する スーパービジョン体制の課題と提言Ⅱ

— 保育を学ぶ学生の児童福祉施設に対する意識調査を基に —

大塚 良一・田中 浩二・福山多江子・田中 利則

1 はじめに

保育実習Ⅰ施設実習（以下、「施設実習」という）では社会的養護の子どもたちを対象に実習を行なう。しかし、近年、社会的養護の子どもたちに対しては、里親やファミリーホームなどの家庭養護の方向性が取られている。また、施設養護の子どもたちの中には、近年、他者との関係性を回復させることや愛着障害を起こしている子などが増えてきている。このことから、施設養護でも小規模なグループによるケアが求められている。さらに、障害関係の実習施設では障害者自立支援法などとの関係から、児童福祉法の一部改正が行われ福祉型障害児入所施設と、保護、日常生活の指導、独立自活に必要な知識技能の付与及び治療を行う医療型障害児入所施設に分かれた。これは従来の障害別の利用者支援から医療が必要な支援とそうでない支援とに分けたものである。

施設実習の実習先としては、乳児院、母子生活支援施設、障害児入所施設、児童発達支援センター（児童発達支援及び医療型児童発達支援を行うものに限る）、障害者支援施設、指定障害福祉サービス事業所（生活介護、自立訓練、就労移行支援又は就労継続支援を行うものに限る）、児童養護施設、情緒障害児短期治療施設、児童自立支援施設、児童相談所一時保護施設又は独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園などの広範囲の施設が挙げられている¹⁾。

しかし、保育を学ぶ学生にとって社会福祉施設への興味関心は薄い²⁾。厚生労働省は、保育士実習の目的として「保育実習は、その習得した教科全体の知識、技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用能力を養うため、児童に対する理解を通じて保育の理論と実践の関係について習熟させることを目的とする³⁾」としている。しかし、短期大学では1年間でこれらすべての施設を理解させ実習に臨ませるのは難しい。さらに、指定保育士養成施設の教員についても実習先の児童福祉施設等について適切に理解し面談を行う訓練がされていないまま、実習生への巡回指導を行っている現況もある⁴⁾。このような中で、施設実習によりその保育の理論と実践の関係について習熟させるためには、実習終了後の取り組みが大切であると考ええる。

本論では変革期にある児童福祉施設等の現況の中で、施設実習により学生が何を学びとるか、そのため施設巡回指導・実習事後指導についてスーパービジョン関係をどう構築するのか、その道筋を検討する。また、実習事後指導の取り組みについて紹介し、学生にとって施設実習とは何かを考察するものである。

2 学生指導とスーパービジョンの視点

スーパービジョンはアメリカ COS（慈善組織化協会）のワーカーのためのトレーニング

訓練にスーパービジョン研修が行われており、ここにその源流をみることができる⁵⁾。しかし、日本でのスーパービジョンの導入はどのようなだろう。大塚達雄などによるスーパービジョンの研究では「ソーシャルワークが多方面から多様な影響を受け、またクライアントの抱える問題や機関も多様化する中で、スーパービジョンの役割や機能、方法は必ずしも整理されているわけではない⁶⁾」とされている。さらに、「スーパービジョンはワーカーの知識・技術を向上させるだけではない。より優れた知識、技能、及び経験を持つスーパーバイザー（supervisor）によるスーパービジョンが、ワーカーの自己確知に重要な役割を担っている⁷⁾」と言っている。また、同時に「我が国にスーパービジョンの概念が本格的に導入されたのは戦後のことであった。当初スーパーバイザーとは福祉事務所における査察指導員のことであった。それ以来、社会福祉実践におけるスーパービジョンの重要性は徐々に認識されるようになり、スーパービジョンが様々な形で行われるようになった。しかしながら実際の用語としてのスーパービジョンのみが独り歩きし、その内容は極めて曖昧なものであるといわざるを得ない⁸⁾」と言っている。

スーパービジョンの関係を理解するためには、本論Ⅰのところで触れたマルティン・ブーバー（Martin Buber 1878-1965）の「対話の哲学」の理解に着目すべきであると考ええる。ブーバーは「我—それ」関係に代わって真に大切なのは「我—汝」関係であると言っており、この関係の中にスーパービジョンの方法があり、スーパーバイザーとスーパーバイジーの対話の中でスーパーバイジーの気づき（直観）により体験されたもの（主観）をスーパーバイザーとの関係によってより自らの生き方を作用するもの（「永遠のいぶき」を感じとること）に変化させていくことが大切である。これは社会福祉を学ぶ実習の指導にも大切な役割であると考ええる。ここでは、保育を学ぶ学生指導に関して、ブーバーの視点から実習指導者の役割を考察する。

3 施設巡回指導の役割と課題

保育を学ぶ学生にとって児童福祉施設に対する興味関心は薄い。平成25年のG大学（2年生対象）調査では、児童福祉施設の中の主流である児童養護施設についての認知度でも「全く知らなかった」「内容は知らないが名前は知っていた」で66人（73%）である。また、児

表－1 保育士を目指す学生の意識調査

質 問	回 答	人	%
児童養護施設について、授業を受ける前から知っていましたか	全く知らなかった	9	10
	内容は知らないが名前は知っていた	57	63
	おおまかなことは知っていた	23	26
	よく知っている	1	1
児童養護施設の子どものついて興味がありますか	全く興味がない	0	0
	あまり興味がない	9	10
	少し興味がある	70	78
	大いに興味がある	11	12

（出所）平成25年9月G大学保育士資格取得予定学生2年生90名の学生に調査。

児童養護施設の子どもについて興味があるかとの質問に関しては、全く興味がないと答えた者はなかったが「あまり興味がない」が9人（10%）ほどいた。この調査に関しては5年ほど継続しているが、数値の大きな変化はない。

児童養護施設でこのような学生の認識状況であるため、他の児童福祉施設に関してはほとんど理解していない状況であると推測できる。

表－2 児童養護施設の実習を行っていない学生の児童養護施設に対するイメージ

	内 容
A	親の虐待等で入所しているので、人との関わりを拒絶あるいは怒りっぽい性格。人との関係で暴力は普通のことだと思っている。または <u>非常におびえている</u> 。自分を見せたがらない。
B	虐待や家庭の経済的理由、病気など、親元で生活が難しい子どもたちがいる。心的、身体的に何か <u>傷をおっていてさびしい思いをしている</u> 。発達が遅い子どもが多い。
C	虐待を受けていたり、家庭環境が少し複雑な子ども。いろいろ抱えているのだと思うし、施設で職員の方たちのもとで、元気に生活しているイメージ。でも、 <u>本当に甘えられる人がいない</u> のではと感じる。
D	嫌なことがあると <u>すぐに怒り出し</u> そうなイメージがある。自分自身がどうすればよいか子ども扱い考えも持っていそうだが大人の意見を持っていそう。
E	児童養護施設に行ったことがないので暗いというイメージがある。実習をした友達の話ではそうでもないとのことなので、 <u>普通の子どもと同じ部分と、そうでない部分があるのだと思う</u> 。
F	家庭で生活したくとも、家族と一緒に暮らせない。（死別や虐待などにより）また、施設の職員も自分だけを見てくれるのではないので、がまん強い、時には悲しい、苦しい思いをしている。
G	虐待を経験した子どもが多いと思う。 <u>表面上は仲良くしていても何かふとした瞬間に心を閉ざしてしまう</u> 可能性がある気がする。

（出所）平成25年9月G大学保育士資格取得予定学生2年生90名の学生に調査。

表2は「児童養護施設の実習を行っていない学生の児童養護施設に対するイメージ」である。これらの回答は授業内容が直接に反映されているものになっている。社会的養護内容の授業では学生に児童養護施設等をイメージさせることを行うためビデオ等により施設紹介を行う。特に児童養護施設に関しては教材として、瓜巢一美監修「保育士になるためのつまずきのある子への保育 児童養護施設 アロウィーン2010年」を使用し、児童養護施設の子どもたちの状況について説明し、タイムアウト、セラピューテックホールドなどの技法について紹介する。また、教員の児童養護施設における現場経験を話すため、事例のもつインパクトが強いため「非常におびえている」「傷をおっていてさびしい思いをしている」「本当に甘えられる人がいない」「普通の子どもと同じ部分と、そうでない部分があるのだと思う」「職員も自分だけを見てくれるのではない」「表面上は仲良くしていても何かふとした瞬間に心を閉ざしてしまう」という表現で施設を表していると考察できる。

これらの学生が実際に児童養護施設での実習を終了すると表3のように変わってくる。

表－3 児童養護施設実習終了後の児童養護施設に対する学生のイメージ

	内 容
AA	実習に行くまでは、虐待されている子どもがいるからかわいそうと思っていた。しかし、実際に実習に行ってみると普通に生活している子どもと同じだと感じた。だけど、 <u>少し情緒的に不安定の子どもの多いとも思った</u> 。
BB	実習前は暗い子・表情が乏しい・暴力的などと思っていたが実際に実習に行ってみると普通の子と変わらないのだと思った。他の子よりできることが多く、下の子の面倒見が良いなど、良い面もあることを知った。
CC	虐待を受けたり育児放棄をされたりなど、いろいろな家庭背景があるけど、ほとんどの子が見るく元気である。
DD	大人からの愛情に飢えている。もっと自分を見てほしい。甘えたいと思っている。感情表現がうまくできない子が多い。 <u>社会的にも成人になる前から自立をせざる得ない環境にいる</u> 。家族など長く付き合える人間関係を求めている。
EE	明るく元気で笑顔いっぱい、普通の子とも変わらないが、小さな背中に大きな問題を抱えている。ボーダーの子が多いように感じた。話し方、内容が大人ぶっているが実は幼い。幼児でも大きい子のおかげで話し方がしっかりしている。自立できている。
FF	過去のつらい経験を乗り越えようと努力している。 <u>施設に入っていることで偏見の対象になりがちだが、明るく元気に暮らしている</u> 。ただ、人間関係を築くことが難しい子どもが多いような印象がある。
GG	親からの虐待により入所している子がほとんどで、慣れるまでに時間がかかり、大人に対して不信感をもっている。甘えを知らず、 <u>特定の大人に対して愛着を築くのが難しい</u> 。 <u>甘えられない子どももいれば誰にでも甘える子どもがいる</u> 。しかし、生活をしている上ではみんな明るく生活をしていた。

(出所)平成25年9月G大学保育士資格取得予定学生2年生90名の学生に調査。

これはブーバーのいう「概念」から「主観」への変化であると考えられる。ブーバーは「主観が我から分離するのを観察しながら追求することによって、主観の本質を説明している。はじめに人間の世界の二重性を示して、この分離を公式化している。「人間が主観として投影に向かうか、それとも生き生きとした我における十全的全体的人間として自己の外にある実存的存在者と関係に入るか、そのどちらかによって人間は両基本語我一汝・我一それのいずれか一方を語るのである。基本語我一それの我は単なる主観である⁹⁾」と言っている。ここで、大切なことは「自己の外にある実存的存在者と関係に入る」ことであり、そこに施設巡回指導の役割がある。たとえば、AAの学生は「少し情緒的に不安定の子どもの多いとも思った」との直観を述べているが、どのような点が情緒的に不安定なのか、また、情緒的に不安定な子どもに対して職員の対応は、また、実習生本人の対応はどうかを明確にしていく共同作業が必要になってくる。

また、同様にFFの学生は「施設に入っていることで偏見の対象になりがちだが、明るく元気に暮らしている」とある。実際にどのような偏見があるのか、また、子どもにとっての世界と自分の世界との違いについて学生と一緒に考えていくことにより、学生自らの世界を変革するものになる。

さらに、GGの学生は「特定の大人に対して愛着を築くのが難しい。甘えられない子ども

もいれば誰にでも甘える子どもがいる」と言っている。このような学生に関してどう関わっていくかを考え対応するのが巡回指導の役割である。黒川昭登（1992年）は「スーパービジョンの目的はクライアントや地域社会に対して適切な福祉サービスを提供することと、これらのサービスの担い手であるソーシャルワーカーの養成訓練の二つである。¹⁰⁾」と言っている。

しかし、実際の巡回指導では学生との時間を設定して指導しているところは少ない。また、施設実習の場合、実習巡回指導者の児童福祉施設等の理解度についても一定ではなく指導に関しても一定レベルを保つことが難しい状況である。そのため、実習後の指導が大切となる。

4 学生理解を深めるための取り組み（KJ法による取り組み）

前述のように、施設実習で学生は初めて体験した施設について様々な意見感想（主観）を持ってくる。それをいかに自分のものにしていくかが大切でありこれがブーバーのいう対話的な思考であると考ええる。ブーバーは「対話的思考の歴史の概説で、われわれ現代人に対話的実存の展望が、どのようにして開かれたのかを示している。このような展望にわれわれが歩み入る作用は、もはや悟性的「認識」ではない。この認識には空間的・時間的直観の制限がつけられている¹¹⁾」と言っている。また、同様にK・エリクセンはヒューマンサービスで「われわれ個々人の人間が実際には如何に複雑なものであるかということを示すだけでも考えてみれば、自己を効果的に使うことが、そう簡単であるなどと言いだないことは明らかである。自己を他人の役に立つように使うためには、人は第一に、『自己理解』に達していなければならない¹²⁾」と言っている。

表－4 実習終了後の授業展開におけるポイント

体験発表
体験発表では次の点について、考えさせる。(15分～20分) 1 実習で楽しかったこと、辛かったことを考える。 2 職員からの話の中で心に残ったことを考える。 3 実習で得たものは何かを考える。 ※1 上記ポイントを基に5分間程度一人ひとり発表させる。 ※2 この時に、指導者は無理にまとめるような発言はしない。
ブレinstoーミング
ブレinstoーミングは集団でアイデアを出し合う方法の一つである。ブレinstoーミングの4原則、結論厳禁、自由奔放、質より量、結合改善を伝え、一つひとつの意見・提案を大切にすることを確認する。
KJ法
KJ法はデータをカード化しまとめていく段階での思考を大切に川喜田二郎が考案した手法である。カードを単に分類するのではなく、カードひとつひとつが書いた人の意見でありカード(意見)を大切に、共同作業を行うことから新たな発想が生まれることを伝える。
発表、意見交換
KJ法によりまとめたものを掲示し、それぞれのまとめに対して、事前に眺めさせ意見をまとめておくよう指示をする。その後、全員で発表を行う。学生同士の意見交換を行う。 ※指導者は学生がどこまで深く考えたかを視点としてみていく。

これらをまとめてみると、体験したことを対話により自分自身の考えと相手との考えとを照らし、自己理解の一つとして整理し、自己を他人の役に立つように効果的に使うよう訓練していく必要がある。これらの一連の行動が、実習終了後のスーパービジョンではないかと考える。

これら実習終了後の授業展開として、実習体験発表、ブレンストーミング、KJ法による施設実習のまとめ、発表、意見交換の一連の流れによりスーパービジョンの役割が考えられる。

表4は一連の過程のポイントである。ここで大切なことは、学生が実習中にどれだけ利用者のことを考えたかということである。三好春樹（1997年）は「いいケアは、知識や技術でできるものではない。肝心なのは、介護者が、今の介護をしている老人をどれだけ知って介護をしているか、ということである。オムツ交換をどれだけ専門的にできるかということより、その老人の生活歴や個性、いまだどんな心理状態になっているか、といったことが頭の中に入って介護しているかどうかなのである。それがないと、介護は、Aさんの排泄介護、Bさんの排泄介護、という個性性をなくし、技術一般になってしまい、老人は“二人め”“三人め”という、介護の順番でしかなくなってしまう」と言っている。学生の立場で実習という限られた期間の中で利用者の置かれている立場また、その人を考え支援したかが大切になる。KJ法でまとめたものは次のようになる。

表-5-1 Aグループ



表-5-2 Bグループ

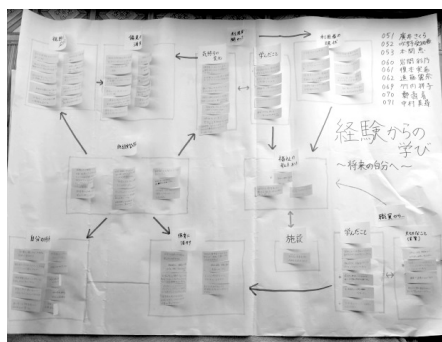
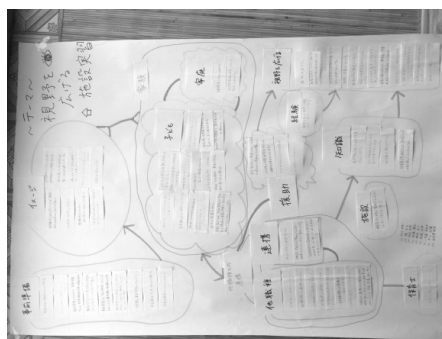


表-5-3 Cグループ



表-5-4 Dグループ



表－6 学生が考えたテーマ

グループ	学生が考えたテーマ
Aグループ	他者の理解・自分の理解
Bグループ	経験からの学び ー将来の自分へー
Cグループ	施設実習 ー新しい発見ー
Dグループ	辛さの中に見つけた光
Eグループ	Open view
Fグループ	視野を広げる施設実習
Gグループ	施設実習物語 意義を知る旅

この時の学生への課題は「施設実習について」という漠然としたもので検討した。その後、カードから導き出してテーマを考えさせたものが表－6である。話し合いによる振り返りにより全く違ったテーマになったことを学生自身も意識したと考察できる。また、理解学び、視野を広げる、発見などの言葉から一つ踏み込んだ言葉でテーマがつくられている。

「表－5－1 Aグループ」のカードをみてみると、表7のようになる。

大きなところの流れでは、事前学習⇒保育士の専門性⇒実習を経て⇒施設実習を行なう意味、となっている。「事前学習」では「事前に本などを読んで理解することで施設の機能ではなく入所した人としっかり向き合える」「事前に発達段階や離乳食のすすめ方など学習しておくことで、それをベースに実習が進められた」とのカードが出されている。このカードから、他の学生はどのような事前学習をして実習に臨んだのか、施設種別ではどのような事前学習が必要なのかを発展することができる。

「保育士の専門性」では「子どもだけでなく子どもを育てていけるよう親に対する支援も重要な仕事だと感じた」「専門職の保育士だからこそ親のような愛情を注げる」とのカードがある。ここから保育の専門職とは何か、なぜ、保育士に保護者、地域の子育て支援の役割が課せられているのかを考える機会となる。

「実習を経て」では「保育所の子どもと違って施設の子どもは甘えても、甘えても、甘え足りない」「知的障害者施設での支援と、子どもへの支援の共通点は一人ひとりに合わせて関わることの大切さで、職員同士の連携が必要である」とのカードがある。なぜこのカードが生まれたか、実習での体験談から虐待を受けた児童の特性、保育士は何ができるか、一人ひとりに合わせる支援とは何かなどの発展から保育士としての専門性を考え、授業で得た知識と実践の結びつきができる。

「施設実習を行なう意味」では「保育士とは何か、その役割などを改めて考え、知る」「様々な家庭の問題を抱えた子どもがいて、複雑な気持ちになった」「親も成長途中である」などのカードがある。これらのカードは、実習を自分にフィードバックしているカードでもある。特に、親も成長途中であるとの言葉から、人の成長、成熟とは何かを考える手掛かりになり、保育の理論と実践の関係について習熟させることができる。

表－7 「表－5－1 A」のカードと区分

大区分	小区分	カード
事前学習	施設ってどんなところ	・施設のことを理解することを第一にするべき ・事前準備（基礎知識・関わり方）の大切さ ・事前に本などを読んで理解することで施設の機能ではなく入所した人としてしっかり向き合える ・事前準備について自分が行く施設についての本などを読み知識を入れておくことが必要である。
	事前学習の効果	・事前に実習施設を調べることでスムーズな実習が行えた。 ・最低知識をもって行くことでより理解を深められる。 ・事前に発達段階や離乳食のすすめ方など学習しておくことで、それをベースに実習が進められた。 ・実習の際、利用者自身を見る余裕が持てるよう、事前に基礎的な知識や施設の概念は頭に入れておくべきだ。 ・事前準備は施設の理解だけでなく自分の強みになる。
	施設実習のねらい目指すところ	・過去と未来から今あるべき姿、関わり方を学ぶ。 ・その子その子に合った保育を考える。 ・一つひとつ子どもに対する関わりが心の傷をケアするようにねらいをもって行われていた。
	コミュニケーションのいろいろ	・自分の感情や言い分を表現する方法は人それぞれに違う。 ・言葉に頼り過ぎず、目や心でのコミュニケーションが大切。 ・コミュニケーションは言葉だけではない。
保育士の専門性	専門的知識の必要性	・手遊びなど遊びの専門知識があったおかげで、利用者に喜んでもらった。 ・イメージだけで理解するのではなく専門的な知識を持たなくてはならない。
	情緒的サポート	・施設での保育者の役割は遊びを通してその専門性を生かし、子どもの情緒を豊かにすることだ。 ・福祉施設に保育士がいることで情緒的なサポートができる。 ・保育士は利用者の情緒面の関わりにたけている。
	保護者へのサポート	・親を否定してはいけない。まずその人の頑張りを認めてあげることが重要である。 ・利用者支援だけでなく、親への支援が大切である。 ・子どもだけでなく子どもを育てていけるよう親に対する支援も重要な仕事だと感じた。 ・子どもだけでなく保護者との関わりを知る。 ・親に対する支援は、その親が必要とすること全てである。
	親のような存在になる	・家庭を知らない子どもが家庭の温かい雰囲気味わえるよう心掛けていた。 ・担当制を持つことで親子の様な信頼関係を築く。 ・家庭のぬくもりを知らない利用者が多く、家庭らしい関わりが必要。 ・保育の仕事よりも、生活の援助が多く、家庭の存在を伝え、情緒面や利用者の世界を広げていくことが大切。 ・専門職の保育士だからこそ親のような愛情を注げる。
	具体的な支援	・集団生活のルールはどんなことがあっても守らせる。 ・その日その日で利用者の心の変化があり、それに合った支援が必要。 ・施設は生活の場であるため、親が甘えられる環境や信頼関係を築くのも職員の仕事。 ・虐待を防ぐため、親子の再統合を考え一緒に母子が暮らせるような支援が必要。

大区分	小区分	カード
実習を経て	利用者について気づいたこと	・ 保育所の子どもと違って施設の子どもは甘えても、甘えても、甘え足りない。 ・ 子どもの母親への依存。 ・ 障害は一つの個性である。 ・ 障害を持っている人はとても素直に生きている。 ・ 理解することで信頼を得ることができる。
	職員同士の連携	・ 子どもを守り職員全体で健康に育てていく連携があった。 ・ 職員同士が連携し一人に対して一貫した支援・または保育をすること。 ・ 知的障害者施設での支援と、<u>子どもへの支援の共通点は一人ひとりに合わせて関わることの大切さで、職員同士の連携が必要である。</u> ・ 一人ひとりの子どもの情報を職員全体で把握する。
	保育し支援の幅広さ	・ 子どもや、その親にとっての最善の利益になるような関わり方、<u>支援の仕方は幅広い。</u> ・ 支援に区切りはない。 ・ 支援の仕方は無数にある。 ・ 保育士という肩書にとらわれない支援をする必要がある。
	支援の基盤となる考え方	・ 前向きにかかわり続けることの大切さを学んだ。 ・ 一人ひとりが好きなことをして、やりたいことが出来るように努力している。 ・ 一人ひとりの障害に合った目標・支援が大切。 ・ <u>相手の気持ちを理解することが大切。</u> ・ <u>笑顔でいることが大切。</u> ・ 社会経験が豊富であるほど、子どもの関わり支援が豊かである。
	利用者に関わることで自分に気づく	・ 障害を持っているため、一見では何をしているのか分からなくても、<u>その人なりの世界があることを理解することが大切。</u> ・ 自分が今までどれだけ言葉に頼って生活していたのかを思う。 ・ 施設に行ったことで障害者の方への偏見が無くなった。 ・ 知的障害者施設での実習をしたことで障害より、<u>その人自身の持つ個性に目を向けることが大切だと気付くことができた。</u>
施設実習を行なう意味	施設実習を行なう意味	・ 人とのつながりの大切さを知る。 ・ <u>保育士とは何か、その役割などを改めて考え、知る。</u> ・ 福祉の重要性を知ることが出来る。 ・ 視野を広げるため。 ・ さまざまな状況の子どもたち、保護者を知るため。
	感想	・ <u>様々な家庭の問題を抱えた子どもがいて、複雑な気持ちになった。</u>
	グッときた言葉	・ 援助は人によっても、その人の個性によっても、常に違ったものになることを理解すること。 ・ <u>親も成長途中である（ことを理解した）</u>

・ 平成25年6月に実施。カード65枚。

5 おわりに

施設実習により、学生は様々な児童福祉施設等を体験し、保育士の役割について再構築しようとしている。表-5-2 Bグループのカードには「相手が障害者だろうが、子どもだろうが、保育・介護に対する気持ちは同じ」「子どもを保育することと障害者を支援することは同じことである」とのカードがある。また、「自分の将来」という区分の中に、「印象に残った人、出来事は将来に活かせる」「将来、自分が障害児者と関わる時、自分がどうすべきか分かるようになった」とのカードがみられる。

ブーバーは「人それぞれの魂は、ロゴスを自分の内に深く持っている。しかし、ロゴスはその充実に達するのは、われわれの内ではなく、われわれの間である。なぜならロゴスは、人間の間で真になるべき言葉の永遠の好機を意味するからである。それゆえロゴスは、人間にとって、共同体的なものである¹³⁾」と言っている。スーパービジョンの基本がここあると考える。

施設実習は単に体験するだけでなく、保育士として保育の理論と実践の関係について習熟させることにある。このためには、実習指導者がどのように理論と実践を結び付けていけるかが問われる場所でもある。また、学生が得てきた体験を「我—それ」「我—汝」の関係にするのか実習指導の役割であり、それを具現化するための一つの手段として KJ 法は有効な手段であることを提言したい。

〈参考・引用文献等〉

- 1) 平成25年8月8日付、厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知『「保育士養成施設の指定及び運営の基準について」の一部改正について』（別紙2）施設実習基準から引用。
- 2) 大塚良一、田中浩二、寺田清美他「保育実習（施設実習）に関するスーパービジョン体制の課題と提言—保育を学ぶ学生の児童福祉施設に対する意識調査を基に—」東京成徳短期大学編集・発行『東京成徳短期大学紀要』2012年、79頁。
- 3) 前掲1)。（別紙2）施設実習基準から引用。
- 4) 施設実習先施設の状況を理解しないで、実習指導に当たったため学生が混乱してしまった例がある。母子生活支援施設での実習で、利用者（母子）との関わりが理解できず悩んでいる学生に対して、施設の現況をよく理解しないままアドバイスをかけて、施設側から母子生活支援施設を本当に理解しての発言か疑問であるとの意見が実習担当者にある。
- 5) 大塚達雄・井垣章二・沢田健太郎・山辺朗子編『ソーシャルケースワーク論』ミネルヴァ書房1994年、184～186頁。
- 6) 前掲5)．p189～190。
- 7) 大塚達雄、井岡勉、木内正一「社会福祉の専門技術」ミネルヴァ書房1975年、180頁。
- 8) 前掲5)．p190～191。
- 9) ツォルタン・パロー著野口恒樹・植村亘共訳「ブーバーにおける人間の研究」北樹出版、1983年、46頁。
- 10) 黒川昭登著『スーパービジョンの理論と実際』岩崎学術出版社1992年、57頁。
- 11) 前掲9)．p77頁。
- 12) K・エリクセン著、豊原廉次郎訳『ヒューマンサービス』誠心書房1982年114頁。
- 13) 前掲9)．p75頁。